

## 英國鋼材

百二十一圓四十四錢

なりし由なれば五割内外の騰貴を示すに至れるものと云ふへし。

## (ロ) 其の他の材料及艦裝品

鋼材以外造船用材として全部又は一部の供給を海外に仰くもの一再にして止まらず、此等は何れも戦亂の結果原價の騰貴と假令原價に異動なきも、海運賃及附帶費の増大により價格の騰貴を告げざるものなし、又内地産品例へは銅の如きも海外の需要盛なる爲、之れ亦著しき騰貴を告げたり、艦裝用品に至りては近時内地製品の使用せらるゝもの多く、其の發達見るべきものありと雖も、尙多數外國品の輸入を免る能はず、内地製品と雖も原料を海外に仰くもの多きを以て特種の事由により、價格に異動なきものを除き、戦亂の結果は、造船用材と共に殆んど全部の用品の價格を騰貴せしめ、尙未だ供給の不足を告ぐるの域に達せざる如きも著しく船價を高からしむるの止むを得ざるの有様なり。(未完)

## 大冶鐵山の沿革及現況(承前)

西澤公雄

## 現況

滔々たる濁流澎湃たる楊子江の九江埠頭を通過して更に遡ること約七十哩の上流、左岸溪谷の間

に小市街と、數洋館の屹然として高く蒼樹の中に聳え、旭旗常に桿頭に翩翻たるを望み得るものは則ち支那湖北省大冶石灰窑市街と我製鐵所出張所是なり。

市街には大冶鑛務局、鐵路轉運局、電報局、大冶醫院、材料局、巡警局、漢陽裝鑛局、湖北水泥廠等あり、我出張所内には大冶俱樂部、西澤公館、日本郵便局、第一、第二事務所、圖書館等の設備あり、俱樂部に附屬する庭園菜圃は約二千餘坪の寛濶を有し、本邦産の樹木、花卉、果實、野菜は部員晨晩の養氣、運動に由て栽培せられ、常に頗る鬱蒼繁茂し、就中櫻樹の如きは長江流域に散在せる本邦人の春季觀賞措かざる處に係り、四圍眼底に映するもの即我國天然の風景なるに依り、駐在官民は恰も自國に活動せるに髣髴し、曾て何等の想郷病に罹れるものあるなし。

大冶鐵道の本線は石灰窑河岸に起り、鐵山の白楊林山麓に到て終る、東碼頭、白石山、獅子山の三分岐線を有するも久しからずして袁家舖新製鐵所に到る新鐵路の敷設を見るへし、停車場は石灰窑、李家坊、下陸、得道灣、白楊林、白石山、及鐵山の七所に設く、下陸、獅子山、鐵山の三地に修理工場を置く、殊に下陸工場は比較的其規模大なり、同工場に据付の機關は三臺にして六十馬力、四十馬力、二十馬力を有せり、下陸には鐵道秤を備へ一回の最重量二十九噸まで秤量し得へし、目下一日汽車の往復は十回以上にして、毎回尠くも二百噸の鑛石を石灰窑に搬出するものとす、鐵道の總延長は二十一哩にして、鑛山インクラインの總延長は約三千五百米突なり、又輕便鐵路の總延長は三千三百米突を有す、大冶鐵道の軌條は獨逸製のもの七十磅、漢陽製のもの九十磅、ゲージは廣軌式四呎八吋五分に係れり。

鐵道用の汽關車數十一臺にして孰れも八十馬力を有す、又客車數、賓客及役員の使用するに充當するもの五臺にして、鑛石荷車數は百七十五個を有せり、大冶波止場は長江江岸に沿ふて石灰窑より起り勝陽港に至り、總延長四千六百十二尺に達す、石灰窑は千七百餘年前より石灰燒製地にして其名ある所以なり、附近の山脈樹木を缺ける赭山なる代りに到る處盛んに無烟炭を産し、土人は夙に其用法

を知悉せしものなるか如く、今尙日常炊爨に薪柴を用ふるものなく、盡く石炭を使用せり。

大冶波止場は優に三四千噸積の船舶四艘を同時に繫泊し得べく、漢陽曳船は毎船四百噸乃至千噸の牽引力を有し常に此地と漢陽鐵政廠間を往復せり、我鐵石船は目下最小二千五百噸、最大五千噸積にして、使用苦力は晝間十二時間の勞働に由て優に一人十噸を積込み毫も疲倦を覺えず、毎年三月末より十一月中旬に涉れる約七個月間は甲船去て乙船到り、殆んど源々岬尾の鑛船に鑛石を滿載して遺憾なく解纜せしむ、製鐵所と支那との契約上には一日千噸の積載を規定せるも、實際に於ては現に一日二千噸積載に堪ゆるものとす。

日本波止場据付の躉船二十六艘、長さ二百一呎乃至二十三呎幅二十九呎、漢陽波止場のものは小形にして六艘、長さ七十呎乃至四十三呎幅二十九呎、躉船に従事する苦力の數は四十一人、積込人夫は毎船二百人なりとす。

又江岸鑛石堆積點より躉船に到る間隔には橋板を準備し、其數常に三百枚、長三八呎乃至三〇呎幅二呎を下らす。

大冶鐵鑛の鑛區總廣袤は約二百平方哩に展布し、露頭鑛量のみにて優に億噸を算し、露頭の傾斜は垂直を爲し、百二十七度の走向を有す、下陸より鐵山停車場に到る間に散布せる露頭を順次に列擧すれば、鐵子腦、下陸山、康山、雌雄兩獅子山、象鼻山、砂帽翅山、鐵山舖是なり、孰れも磁鐵鑛に屬す、目下採掘中に係るものは雄雌兩獅子山、砂帽翅山、鐵山舖の四露頭に於て獅子山の鑛石は殆んど我八幡製鐵所に供給し、鐵山舖及砂帽翅山の鑛石を以て漢陽鐵廠及北海道輪西の需要に應せり。

採掘は純然たる露天稼業に屬し、露頭の上部を崩壊せしめて之を採取するものなるか故に毫も複雑なる機關器具を要せず、近時鐵山舖の一部に壓迫空氣を應明する鑿岩機を試使せり。

前項列記せる露頭の外に大冶、武昌、陽新三縣内には尙頗る多數の各種鑛石を包含し、鐵鑛以外銅、銀、

マンガン、石灰石、苦灰石、石炭の量巨額に上れり、要するに大冶鐵道の左右沿路は製鐵原料の五種を悉く具備するを以て、大冶は或意味に於て天然の製鐵所と稱するを得へし、予は曾て故張之洞と會見せし際、談偶々大冶の鑛産豐饒なるに及ふや其何か故に大冶に製鐵所を置かすして、殊更に漢陽の地を下せる乎を質せしに、彼は躊躇なく答て曰く「貴下の質議は想ふに所謂工業經濟を無視せしを責むるものならんも、未だ東洋に於て製鐵所の創立を見ざる際に於て、工業の幼稚なる支那が率先して其衝に當らんとするは實に容易にあらず、國民に製鐵業の必要を鼓吹せんとするには勢ひ其實物を示すを要す、山間僻陬の大冶の地は此目的に於て極て不便なり、故に一時工業經濟を犠牲にし官民の常に輻輳する漢口、漢陽、武昌の境域を擇んで製鐵所を設立せし耳、貴下請ふ能く之を諒せよ」と流石に當時支那有數の達識人物とて言ふ所又一種の名論卓説たるに背かずと云ふへし。

目下獅子山に於ける一日の採掘高は一千七百噸にして、鐵山は八百噸内外を算し兩三年内に一年の採掘高を最小百萬噸となすの計劃にて、今や擴張設備の完備に急なり。

一噸積運搬荷車の數は獅子山に一千二百個、鐵山に五百個を備ふ、但荷車長四呎三吋、幅二呎三吋二分、深一呎八吋五分。

鑛夫人夫の總數獅子山、鐵山を通して目下四千五百人

但臨時の土工、苦力は之に算せず。

修繕工場の職工百四十人。

大冶鑛務局に屬する漢冶萍公司の役員は五十六人に上れり。

給料は役員及職工の外悉く日給にして、鑛夫一日貳拾仙乃至四拾仙、苦力人夫一日百六十文乃至三百文、職工の俵給は七弗乃至七十弗なりとす。

#### 輸出鐵鑛量

自明治三十三年起至大正三年終

一、八幡製鐵所購入鑛石數量

百六十八萬九百九十二噸

但送狀記載面に據るか故に陸揚高とは固より多大の差額あり。

八幡製鐵所大正四年豫定購入數量

二十五萬噸

二、漢陽鑛石の輸送自一千八百九十二年日起至一千九百十四年終

六百萬噸

一千九百十五年の豫定數量

三十萬噸

三、北海道室蘭輪西輸出鑛石大正二年及三年度

五萬一千噸

同大正四年度豫定の分

五萬噸

合計  
輸出濟の分  
豫定の分

七百七十三萬一千九百九十二噸

六十萬噸

輸出鑛石の品位(漢陽鐵廠分析に據る)

年 度	鐵	磷	銅	硫 黃
一九〇〇	六六・一〇	〇・〇四六	〇・二一	〇・〇一
一九〇一	六五・七〇	〇・〇四二	〇・〇九七	〇・〇〇三
一九〇二	六五・一八	〇・〇四一	〇・二〇六	〇・〇一
一九〇三	六四・八九	〇・〇四六	〇・二二	〇・〇二
一九〇四	六五・〇一	〇・〇四二	〇・二五	〇・〇三
一九〇五	六五・三〇	〇・〇五〇	〇・二四	〇・〇二
一九〇六	六四・八三	〇・〇四七	〇・二八	〇・〇一
一九〇七	六四・八五	〇・〇四六	〇・二二	〇・〇二

大治視察者統計表

年 度	日 本 人	支 那 人	外 國 人	計
一九〇八	六五・二三	〇・〇四七	〇・一二	〇・〇三
一九〇九	六四・九六	〇・〇四三	〇・二三	〇・〇三
一九一〇	六四・五〇	〇・〇四五	〇・二六	〇・〇五
一九一一	六三・九三	〇・〇五一	〇・一五	〇・〇四
一九一二	六四・八二	〇・〇四二	〇・二三	〇・〇三
一九一三	六三・八五	〇・〇四五	〇・一九	〇・〇二
一九一四	六三・五二	〇・〇四九	〇・二一	〇・〇三
一九〇〇	一三八	五二〇	一一〇	七六八
一九〇一	一九五	七一九	二二四	一、一三八
一九〇二	三一七	一一、二二〇	四二五	一、九六二
一九〇三	四一五	九六七	七二五	二、一〇七
一九〇四	二五六	八七四	三五六	一、四八六
一九〇五	三四七	九一七	四二六	一、六九〇
一九〇六	八一八	一一、三一〇	二五六	二、三八四
一九〇七	九五六	七五二	二三四	一、九四二
一九〇八	一一、二二一	四八六	一九八	一、九〇五
一九〇九	一一、三一七	六七八	一三三	二、一二八
一九一〇	一一、三九八	一、七二五	一六七	三、二九〇

一九一四	二、五〇一	一、九一六	一五二	四、五六九
一九一三	二、七〇三	二、〇三二	一〇八	四、八四三
一九一二	二、五八三	二、〇九八	二〇八	四、八八九
一九一一	一、四一九	一、七〇八	一八二	三、三〇九

自明治三十三年  
至大正三年 大冶發着鑛石船及帝國軍艦表

年	鑛	石	船	軍	艦
一九〇〇	飽浦、立神				
一九〇一	マラコルプ、飽浦、マクダフ、アーノルドライケン			愛宕、和泉	
一九〇二	若松、マラコルプ、大冶、飽浦			愛宕、宮古、高千穂、宇治	
一九〇三	大冶、若松、ウラブラント			宇治	
一九〇四	大冶、ニグレシヤ、ジャーマニア、マリセブセン				
一九〇五	ノールド、ボンスタイン、若松、大冶、レボアー、スカ ルド、福浦			宇治、高千穂、千歳、秋津洲	
一九〇六	田浦、若松、鳥羽、福浦、大冶			秋津洲、隅田、宇治、高千穂、伏見	
一九〇七	大冶、福浦、若松、壽瀨、田浦			伏見、宇治、浪速、和泉、隅田、新高	
一九〇八	大冶、田浦、壽寶、若松、福浦			隅田、伏見、音羽、宇治、明石	
一九〇九	福浦、若松、大冶、田浦			隅田、伏見、明石	
一九一〇	若松、大冶、福浦、田浦			對馬、秋津洲、伏見、隅田、龍田、初霜、滿洲、最上、神風	
一九一一	若松、大冶、福浦、田浦			卷雲、松江、鳥羽	
一九一二	若松、大冶、福浦、田浦、愛國、興安、北都、加賀、伏木 眞盛、第三大運、日邦			響、如月、初霜、伏見、千早、龍田、鳥羽、隅田、滿洲、千 代田、敷波、新高、淀、須磨、最上、嵯峨	
一九一三	若松、大冶、福浦、田浦、第三大運、藥取、第二歐羅巴、 第三雲海、第三喜佐方、大北、神明、大日、廣東、天龍、 久滿加多、第十一多聞			隅田、千代田、最上、龍田、對馬、新高、須磨、伏見、千 早、子ノ日、朝風、潮、若葉、嵯峨	

一九一四

大冶、松浦、豐浦、若松、福浦、大日、大星、第十二多聞、日連、藥取、第三喜佐方、海福、日朗、東和、安陽、ハド

嵯峨、宇治、鳥羽、隅田、千代田、笠置、淀

(完)

## 本邦製鐵事業の過去及將來(承前)

野 呂 景 義

別子銅山濕式收銅法試驗報告(承前) (著者 今泉嘉一郎)

### 第三節 別子銅山記事

前記試驗を行ふには日本南海一帯に連綿せる含銅硫化鐵鑛床中の鑛物に如くものなし、今日我國に於て此鑛物に對し最大規模の冶金業を執るものは伊豫國宇摩郡別子銅山なり、此地や驚くべき富厚長大なる鑛床を有し、加ふるに有名なる鑛業家住友氏か父祖二十一世二百餘年間殆と間斷なく採掘に従事せしを以て現今に至りては日々百數十噸の鑛石を採取し、全國中多く其比を見ざる繁盛なる鑛業を營むに至り、從て冶金の業も亦大に規模の見るべきあり、特に濕式術を以て銅鑛を取扱ふところの冶金場は我國多く其類なきところなれとも當地に於ては早く已に十餘年の往時より此法を行ひ來り、明治二十五年度の如きは凡四十萬斤の精銅を此方式に依りて産出するの豫定ある如き有様なり、去れば本試驗を實行するは別子銅山に於てするこそ最も適當の事なり、依て之れを同地に行ふ。